

新建福岡・NOW

第27号 2023.03.14

発行元
新建築家技術者集団
福岡支部事務局
〒815-0041
福岡市南区野間 3-9-20-4F
[ケイ・プラッツ内]
Tel/Fax 092-541-8128
HP ; shinken-fukuoka.net

建まち誌 10月号 (No.523) 福岡支部 特別編集委員で担当 九州特集「地域文化の再評価・新しいしくみづくり」



No523号 秋らしく柿色の表紙で、写真は特集の中にもある柳川のお堀とどんこ舟。柳の足元には彼岸花も季節感を出しています。もう皆さん、読まれましたか？

特集の執筆者は福岡支部の特別編集委員が何度もミーティングを重ねて、30人を超す候補者の中から、選びに選び抜かれた方々になるのですよ。笑

宮崎県諸塚村の魅力ある地域文化の再生に取り組む矢房氏、NPO 法人の新たな可能性を皆で育て作る世の中づくりに向ける大中氏、長崎街道の菓子文化からまちづくりを楽しむ村上氏、八女の伝統建築の保存と再生に取り組む北島氏、柳川で一社を立上げ古民家活用を様々な形でしている北島氏、博多の祭りや生活をごりょんさんの眼から描かれた徳安氏、ダムに沈む発電所の技術的保存に取り組む丸田氏、工業製品により厄介者扱いされている竹の新しい利活用を実践されてある佐藤氏。以上 8名の皆さまで、それぞれの立場(組織形態)や地域は異なりますが、そこに住む人が地域に根ざして地域の文化を守り継承している事例となっています。

当初は天神ビッグバン、博多駅再開発、熊本地震からの復興、度重なる水害など、再開発と自然災害に向き合い復興する話も記事に出来ないかと検討していましたが、「地域文化の再評価・新しいしくみづくり」というテーマに落ち着き、明るい未来を想い過去を継承しながら現在をいかに生きるか を、それぞれ語ってくださっています。

原稿が書きあがった頃、岐阜からの友人が来福する機会があり八女と柳川を案内しようとダブル北島氏を訪問しました。御礼を兼ねての訪問だったのですが、友人に詳しく現地を説明してもらうなど返ってお手間を取らせてしまいました。岐阜の友人はディープなガイドに大感激。出来上がった10月号も送りましたが、その後読者になってくれたかな・・・笑

ちなみに表紙の写真はその時撮ったものです。編集後記にも書きましたが、建まちを発行する裏方作業を経験すると、感動と感謝がいつそう深まります。より多くの方に読んでいただきたいと思っています。(巻口義人)

沖本円さんの感想を添えて、8名の執筆者を紹介します

矢房 孝広「暮らしや生業に繋がる知恵は生き残れるか 評価軸の変化と適応」

地域の活性化は経済成長を目指すのではなく、大切なのは人との関わり方。ヒト・コト・モノの交流から、未来に向けて人材育成へ相互理解と融和を目指して行政に携わる方が積極的に動いておられることが何より希望を持てます。

大中 幸子「まちの入りあい地 好きなことを、好きなとき、好きなように」

大中さんとは、福岡市ボランティア交流センター「あすみん」で5年間非常勤職員をしていた頃に薬院の事務所に何度かお邪魔させていただいたことがありました。私の拙いボランティア活動の出会いの中でも印象に残った出会いでした。ボランティア活動の真髄「好きなことを、好きなときに、好きなように」を、体得

するにはまだまだで今は「やれることを、やれるときに、やれるだけ」ですが「やれることが好きなこと」になるように出逢いに感謝しつつあります。

村上 雄二「シュガーロード」の菓子文化を繋いで取り組むまちづくりの可能性

行政のワークショップから、参加者が勝手に立ち上げマップ作りや情報発信。ここでも大切なのは人とのつながり。楽しみながら連携するネットワーク作りにも出逢いが大切なことがよくわかりました。

北島 力「継続する歴史まちづくりの現場から

伝統建築技術伝承、空き家再生、コミュニティ持続～福岡県八女市八女福島重伝建地区」まちづくり持続のために「人材の掘り起こし」「人材と人材をつなぐ」「創意工夫と挑戦」これらは諸塚村のまちおこしとおなじくですが、情報発信、連携を目指してドキュメンタリー映画を創られた実行力が素晴らしいです。

北島 智美「暮らし続けたいまちへ 柳川の伝統を温め伝える地域のしくみづくりと実践」

各地のまちづくりと同様に行政の市民講座やワークショップから始まり住民の皆さんの横のつながりがボランティア活動になり、NPO 活動へと広がり皆さんの出逢い、熱意、協力によって活動が継続していることを、沢山の方々に知っていただくことが、さらに広がるヒト・モノ・コトの新しい活動になると思いました。

徳安 和美「博多からの恋文」

「博多ごりょんさん」の会は山笠に携わるのぼせもんの博多っ子の要の会ですね。山笠も放生会も歴史ある博多の神社の神事なのですね。「博多は人(で持っている)」の心意気に共感します。今福岡市は住民置き去りの「天神ビッグバン」が始まっています。博多には商人の町として2000年の歴史、培われた文化、古刹、まちやが残っています。それらを大切にさらなるヒト・モノ・コトとの出会いとつながりを願っています。

丸田 洋二「コラム：ダムに沈んだ煉瓦造りの発電所」

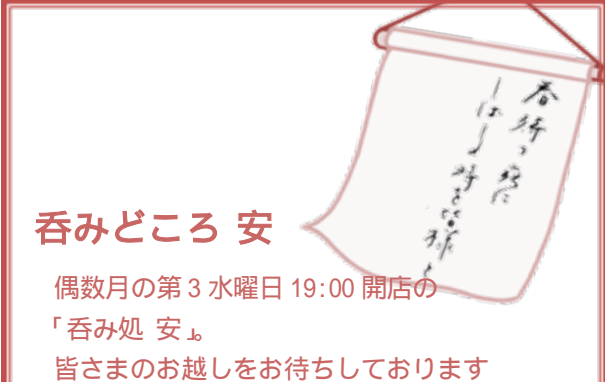
明治末期に造られた煉瓦作りのダムが昭和に作られた新しいダムによって水没し、遺構として、夏季の洪水調整のための水位下降時のみ姿が表れるのを平成になって建築物として評価され保存工事が実現したという、そしてその遺構が鹿児島県の近代化遺産として観光資源となっているという珍しい事例ですね。令和になっての大雨で壁の倒壊がありながら復旧に向けて取り組みが始まったとのこと。およそ百年前の水没する煉瓦作りのダムの保存補強工事とはロマンティックですね。但し、この発電所の後半の五十年は熊本県水俣の「チッソ」の自家発電所として、使用されたという近代化がもたらした負の遺産も忘れないように心に刻みたいと思いました。

佐藤 研一「竹の新しい利活用を考える」

最後に福岡大学を中心とした産学連携の研究会「竹イノベーション研究会」の活動から新しい技術と連携を目指す「竹プラットフォーム」を構築して、様々な分野に広がり活動しておられるものの、竹の集荷・流通システムがすでになく、放置竹林(所有者不明が多い)問題、人材不足、集荷場所の確保など課題山積みとのこと。ここでもヒト・モノ・コトのつながりと広がりをお願わずにはおられません。造園に関わる身としては、出来ることのあるならば出来るだけのことをしたいと思えます。植物に生かされて動物は生きていけることに改めて思いをはせながら...

建まち誌九州特集 福岡支部特別編集委員

伊藤捷治、大坪克也、鹿瀬島隆之、片井克美、
城戸万之助、新谷肇一、古川学、巻口義人、
矢野安希子、渡邊美恵
Special Support 桜井侑子



呑みどころ 安

偶数月の第3水曜日 19:00 開店の
「呑み処 安」
皆さまのお越しをお待ちしております

発行後の感想を聞く機会がなかなかないので、新建 Now に感想も寄せてもらいました

毎週土曜日朝、片井さんの「建まち誌」の読み合わせに参加しているのですが、ちょうどこの九州特集を読むころは、NETの調子が悪かったりで、自身の都合で参加できず、一人読みしました。

35年前でしょうか、自宅を建てた時、乾燥した木材を探し回りました。結局星野村から調達し、どうにか家は実現しました。そんなことを知ってか、ある方から「諸塚村森林組合」に紹介しようかといわれたのですが、小さい子を抱えそんな遠くまで出かけていく行動力も知識もなく、お断りしてしまいました。今思うと残念！今回の九州特集 矢房孝弘さんの文章を読み、ああこういう方がいらしたから、諸塚村をめぐるネットワークができていったんだなあ～と、自分の勉強不足を痛感しました。その後にあった九州森林ネットワークのYouTubeも拝見させていただき、活動に敬意を表したいと思います。

これを取り上げてくださった九州特集担当の皆様、ありがとうございました。（浜田あい子）

テーマ検討、執筆者の人选、そして特集記事。全てが良かったと思います。特にテーマの掘り起こしプロセスは福岡支部らしくて素晴らしかった。担当した大中幸子さんはちょうど活動を閉じられたタイミングで、そのダイナミックな活動の総括として綴られた当特集号は、関係先への「通信」として150部もオーダーいただいたようで、それもGoodでした。（大坪克也）

今回の特集では、企画会議から関わらせてもらいましたが、まず、会議参加の皆さんの関心やネットワークの幅の広さ、奥の深さに驚かされました。最終的に執筆を依頼した方々の他にも、機会があればぜひゆっくりと話を聞かせて頂きたい方がたくさんおられました。私は巻口さんご推薦の八女でまちづくりをされている北島さんの原稿のやり取りを担当しましたが、先日、建築士会のヘリテージマネージャー養成講習の講師として、北島さんが登壇され、建まち誌記事の話の前段の話なども聞くことができ、併せて大変勉強になりました。

今回の特集を通して、あらためて、九州の懐の深さと魅力を知る貴重な機会になりました。（古川学）

川崎さんの

日本で一番わかりやすい 木造住宅(4号建物)の構造設計



今回は、鉄筋材料の豆知識「異形鉄筋のお話」



木造住宅の基礎に異形鉄筋 D10, D13 をよく使用されるかと思いますが、この異形鉄筋の材料種別は SD295 または SD295A と図面に記載します。

この材料種別、元々は JIS G3112:2010 に SD295A と SD295B の 2 つの規定がありました。日本工業規格(JIS)が日本産業規格(JIS)に変わったことに伴い、2020年4月20日にこの JIS が改定され、JIS G3112:2020 となりました。これにより SD295B が廃止となり、SD295A が SD295 に変更されました。

それならば、建築設計図書も JIS 変更に合わせて SD295A の表示をやめ、SD295 に合わせれば良いのでは？とも思えますが、建築基準法令は様子が少し違ってきます。建築基準法令は、JIS G3112:2020 ではなく、今でも JIS G3112:1987 のままで、SD295 ではなく SD295A を用いる事となっています。

よって、設計図書に記載する SD295 または SD295A の記載は上記の事を考慮して表示する必要があります。

（株式会社川崎構造設計 川崎薫）

2022年度の支部総会を開催しました

10月18日に会場(新谷さん自邸)とZOOMを併用して開催されました。出席者は22名(ZOOM含)、委任12名の計34名(会員59名)となり、成立しました。また、ゲストとして日鉄エンジニアリングの笹野さんに出席頂きました。

2022年度も昨年度と同じく新型コロナウイルスの流行(第6波と第7波)によって支部活動が制限されましたが、仕事を語る会や山本厚生氏を講師に迎えた新建学校、アスベスト勉強会など、少しずつ例会が増えてきたようです。また、2022年度は新建福岡支部50周年記念事業として、記念誌の編集作業が進められていましたが、総会当日に完成のお披露目となりました。会員個人の人柄が見える充実した記念誌になっています。会計の原田さんからの収支報告の後、片井支部長から2023年度の活動方針を示されました。具体的な活動としては、仕事を語る会やレクリエーション、新建学校や勉強会が計画されています。記念誌を読んで会員個人の取組みなどをヒントに企画を立てていこうという意見が出されました。また、総会の最後には大坪さんより例会のアイデアを募るためのプレストが行われました。記念誌からのヒントと併せて、どのような企画が生まれていくのか楽しみです。

総会後は同会場で水炊きを囲んでの賑やかな懇親会が行われたようです。

(報告：中島健太郎)



福岡支部 50周年記念誌が完成 支部総会で配布しました

1912年2月に設立した新建福岡支部は、昨年50周年を迎えました。50周年企画の一つとして記念誌製作を掲げ、これまでの支部会員各々の仕事や新建との関わり、支部活動の記録を綴った212頁の記念誌が完成しました。支部総会に来られなかった会員の方には、郵送でお届けしました。

59名の会員のうち、半数を超えの40名の方から原稿が届いた会員の紹介コーナーは、お人柄が感じ取れて、楽しいページとなりました。原稿を提供いただいた会員みなさま、ご協力ありがとうございました。

つぎは、還暦を迎える2031年です。引き続き福岡支部は、新しい仲間を迎えたり、いろいろな団体とつながりを持ち、楽しみながら、いきいきと活動していくことと思います。この記念誌をきっかけに、新しい企画、会員同士の交流などが生まれたら嬉しい限りです。(編集委員：鹿瀬島・巻口・月成)



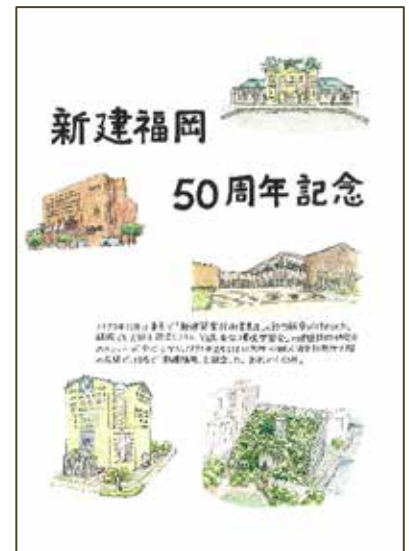
新建 Now に感想が届きました

古い会員が生きているときに昔話でなく、福岡新建の歴史を伝えることができる貴重な50周年誌です。

よくまとめられていました。ありがとう。（福永博）

改めて色んな人がいるなあ、、、と感慨深いものがありました。これこそ新建らしさ、福岡支部らしさではないか、と感じました。編集諸氏のご苦労に改めて感謝申し上げます。（大坪克也）

まず、2018年に新建に入会した私にとっては、よく知らない方のほうが多い支部会員のみなさんのことや、過去の新建Nowのおかげで、入会前の活動についてもことも知ることができ、とても有難い一冊となっています。表現されている内容も、新建らしく、自由かつ個性的で、読み物としても飽きることなく、楽しませていただいています。納得のご経歴や、逆に、とても意外な一面を見せてくださるもの、いずれにしても、会員のみなさんのお人柄を示すものが多く、既になんかから色々とお世話になっていますが、これからも、もっと新建福岡支部のみなさんにお世話になりたいと思ひ(笑)、そして、自分自身も、少しでもみなさんの役に立てるようにしなければと思わせていただきました。（古川学）



12
/
21

ひさしぶりのリアル忘年会 ~ 呑み処安 zoom 併用 ~

12月21日、「呑みどころ安」にて、リアルでは3年ぶりの忘年会が実現しました。zoomで飛び入り参加して下さった長野の安藤さん、ありがとうございます。私自身は、「呑みどころ安」に初めてお伺いしたのですが、素敵なインテリアでとてもくつろげました。

渋田さんと矢野さんが腕によりをかけた手料理が並び、特に、奄美大島の郷土料理“鶏飯”が最高でした！さらに、鹿瀬島さんが育てて収穫し、ご自身で調理した青パパイヤ料理も、意外と(?)美味しかったです。私自身は天神のデパ地下で稲荷寿司を調達するのが精一杯でしたが。

日々の仕事の悩みに始まり、ついには新建の将来について話が盛り上がり、くつろぎすぎて、ついつい深夜まで飲んでしまいました。お店での忘年会だと営業時間という限界がありますが、「呑みどころ安」の場合は良くも悪くもエンドレスです。

さすがに私は日が変わるころにお暇しましたが、その後も宴会は相当続いたようですね。皆さんお強い・・・。(報告：鳥居玲子)



8月6日(土)に福岡支部では山本厚生さんに講師としてお越しいただき、新建学校を開催しました。当日は会場16名、zoom14名、計30名の参加がありました。感染防止のため大幅に規模を制限して行いました。

今回の新建学校では、山本厚生さんが「今伝えたいこと」について広い内容でお話をしてくださり、「これまでの総まとめ」を受け取っている様な気持ちになりました。「新建のこれからを見据えた上での福岡支部への期待」を強く感じ、身が引き締まる様でした。

講義では山本さんが娘さん一家の暮らす神奈川県の日沢へと住まいを移され、新しい土地で地元の方々と交流を広げていく過程もお話しいただきました。山本さんが大事にされてきた日本の家の要素を余すことなく取り入れた住まいを日沢の地に実現され、その「家」に惹かれて興味を持った様々な方がご自宅を訪れ、そして厚生さんとヒカルさんお二人のお人柄の魅力によってたくさんの繋がりが広がり深まり、その中から『自分たちのまちを良くしたい!』というまちづくりの運動まで発展している様子が大変興味深かったです。住まいは人と人を繋ぐ仕掛けになり得るのだと実例を示してもらったようでもありました。

また、お話の中で地元の人を巻き込んでゆき、「一人一人の自覚を促してゆく」様子も語られましたが、これには山本さんの「人の話を引き出してしまふ凄さ」を改めて感じました。わたしは二十歳そこそこで山本さんに初めてお会いしましたが、父以上に年齢が離れているにも関わらず、歳の差を忘れてしまうくらいに会話が楽しかったことをハッキリと覚えています。いつも時間があっという間に経ち、まるで友人と会話をしているような気持ちになることに衝撃を受けたのですが、それは今でも変わりません。そう思われるのは一体なぜなのだろうと考えるのですが、山本さんは話す相手の立場までおりにてくださるからなのかな、そんな「人との向き合い方」が様々な人との関係を深めていかれている秘訣のひとつかも知れないと思ったのです。

最後は日本国憲法の条文や「収容所から来た遺書」から山本さんの父君に生き様や遺書の内容もご紹介いただきながら、未来への確信を持つ、未来を語り合うことが今を乗り越えこれからの生きる力になる、といった力強いメッセージを語っていただきました。

今回の企画を立ち上げた頃には思ってもみなかった程に、コロナ感染が広がる状況と重なってしまい、参加人数や懇親会など規模を縮小せざるをえなかったことは悔しい思いでしたが、この大変な時期に「福岡にだけは絶対行く!」と近々の予定を全てキャンセルして万全の体制で来福して下さったお二人には感謝でいっぱいです。また、当初大反対(お二人の安全を思えば当然です...)されていたご家族にも、最終的にお二人を送り出していただいたことに心より感謝をいたします。

(報告:中島梢)



お知らせ・予告

内容や時期が変更になる場合があります。ご了承ください

「仕事を語る会」5月9日(火)1 語り手:渡邊美恵さん(木の和設計 / 50周年記念誌 P90)

メーリングリストでアンケート協力をお願いがありましたが、夏頃を目処に「天神ビッグバンを考える」催しを企画中です。

風のいろ (第九話) 小形 ひなみ

前回のあらすじ

到着した空港ロビーに、二年ぶりの拓二が出迎えていた。

「結婚しよう」予想すらしていなかった言葉がのり子の耳元に響いた。

久しぶりのデンマークの風は、忘れ物を探し出したような安堵感を感じさせてくれる。結婚の話は唐突だったが、その夜、素直な気持ち伝えようとする拓二の眼差しを、のり子はすでに受けとめていた。

日本に帰ったら、今まで仕事の傍らで書いてきた小説を書き続けたい、結婚してお金の苦労をさせることになる、という拓二の言葉もさほど気にならなかった。お互いに好きな仕事をして、たまたま自分は収入を得ている。それだけの話だ。

「博多の港に近いところに大山先生が住んでいた部屋があるけど、東京に移られてからもまだ借りたまみたいだね。その後を二人が借りれないか聞いてみようと思ってるんだが。」

承伏し難い思いながら結婚を許してくれた父から、二人の住む部屋の話が出て、のり子はどれほど両親に心配をかけてしまったのかと改めて申し訳ない思いと、ありがたさでいっぱいになった。

拓二が東京を経由して福岡空港へ着いたのは、のり子がデンマークから帰国してほぼ二ヶ月が過ぎ、秋になっていた。事前に契約を済ませていた博多の部屋で、先に拓二が生活を始めることになった。

電車通りから路地に入ると、角にクリーニング店、少し奥に博多の海産物を扱う店が並んでいる。このあたりは古くからの問屋街で、天神からもそう遠くない。

間口二間半ほどだろうか、奥に長い鰻の寝所のような建物で正面左端に階段。一つのフロアに二戸の配置になっている。このビルは、工務店をやっていたオーナーが当時の社員寮として建てたという。

二人は五階の扉を開けた。

「なんか、懐かしい雰囲気だね。」

「部屋の床なんて、小学校の頃の板張りを思い出さない？」前に住んでいた書家の大山先生が部分的に手を加えていて、それをそのままにでもらっていた。

玄関を入ると、正面に和室。地窓の障子からの柔らかい光が、薄暗い廊下を照らしている。

リビング奥の部屋も4枚建ての障子で仕切られ、和室の壁以外は全てペンキで仕上げられている。

真新しい設備はないが、それが一層この部屋に趣を添えているように思えた。

事前に準備した小さなテーブルと、ベッド。

拓二がパリ時代から大事にしてきた油絵が一枚。

二人の暮らしが始まるうとしていた。



2022
7~12月
(計12回)

オークヴィレッジ 上野英二氏 第4期九州民家大学 修了

会場の対面受講に加え、オンラインでのライブ受講も受け、北は北海道、南は沖縄まで計58名(うち新注册会员10名)が受講しました。今期は、岐阜高山で住宅のほか、店舗などの建物を伝統構法で設計しているオークヴィレッジの上野英二氏を講師に迎え、「伝統構法を現代に生かす設計術」をテーマに学びました。事例を中心とした講義で、設計への向き合い方をお話いただきました。「失敗のおかげで、先に問題に気付くようになった。挑戦には失敗を伴う」という言葉が印象的でした。

(伝統木構造の会九州地域会、日本民家再生協会九州・沖縄地区、新建福岡支部共催)



< ラーゲリーより愛をこめて > 上映がはじまりました

原作は辺見じゅんさんの「収容所（ラーゲリ）から来た遺書」で、戦後のラーゲリで起きた実話です。瀬々敬久監督によって映画化されました。昨年8月に新建学校でお話して下さった山本厚生(新建代表幹事)さんは、この映画の主人公 幡男(はたお)さんの次男で遺書を受け取ったひとりです。3月現在も上映している映画館がありますので、各映画館へお問い合わせください。映画を鑑賞した大坪さんより感想が届きました。



昭和30年生まれの私にとって、この年は「もはや戦後ではない」と言われる新たな時代のスタート、自分はその時代を生きる、と理解していた。しかし、「ラーゲリからの遺言」が家族に届けられたのは昭和32年。戦後は終わってはいなかった。しかもその10年余りは想像を超える過酷な日々。何故、このような理不尽があったのか。

戦後処理の混乱の中、最重要とされた“国体護持”のために行われた満州での棄兵、棄民の政策。特に満州において俘虜となった兵隊については、日本はソ連に対し“労働力提供”という取引を行なったのである。

辺見じゅんの原作「収容所から来た遺言」が「～愛をこめて」と改題され、「11年に及ぶ愛の実話」というコピーを添えられ、映画は愛の物語として描かれる。しかし、私の第一の感想は、自国民を守ろうともしないこの国の姿勢に対する怒りであった。80年前のその施策は顧みられることもなく、現代の棄民政治へとそのままつながっている。

新建代表幹事の山本厚生さん。そのお父上である映画主人公の山本幡男は満鉄の調査部にあり、ロシア語にも堪能で「北東アジアの諸民族」という研究書も著していた。幡男を演じるのは演技力に定評のある二宮和也。期待にたがわず素晴らしい演技である。幡男の妻、母国で帰りを待つモジミを演じるのが北川景子。美貌の女優に当初期待は薄かったが、その演技も素晴らしかった。特に、幡男の訃報に一度だけ見せる号泣のシーンは目に焼き付いている。

映画では、幡男を取り巻く多くの人々がごく少数の人格に集約される。戦時の自らの階級を引きずりつつ苦悩する将校たちの象徴として相沢 / 桐谷健太。心を病む原 / 安田顕。幡男に心の傷を癒される松田 / 松坂桃李。そして句会を通して希望を手にする人々の姿を新谷 / 中島健人。

幡男の呼びかけで始まった短歌、俳句、詩文を楽しむ句会「アムール句会」は映画では過酷な日々を和らげる存在として描かれるが、原作ではさらに重い。将校から一兵卒、民間人に至るまで様々な人々が集まっている。まさに「希望」の証しなのだ。

幡男が一人ひとりを励ます時に言う言葉「希望を捨ててはいけません」はこの物語のもう一つの主題であろうと思う。遠く離れた妻モジミと幡男が二人同じく希望を持ち続ける姿は、強い愛の形である。しかし、同時に「希望」は幡男の凜とした生き様そのものであり、仲間を励ます力であった。が、実はそれにとどまらず、この映画の観客、現代を生きる我々へのエールなのかも知れない。そう感じた。(大坪克也)

編集後記

久々に「新建 Now」に携わり、日頃からパソコンに触れる機会がなくなっていたことを自覚させられました。不調法ばかりで月成さんはじめメンバーの方々にご迷惑をおかけしながら月成さんに何とか形にさせていただきました。ありがとうございます。

さて先月(2月)うれしいニュースがありました。メンバーの中島さんご夫妻に新たな家族の誕生です。健太郎さん、梢さん、おめでとうございます。お子様の健やかな成長を願って心よりお祝い申し上げます。

長かったコロナ感染パンデミックも、漸く終息の気配が見え、以前とは少し違うけれど落ち着いた日々が戻りそうです。春のお花見に皆さんと再会できることを楽しみにしています。(沖本)

(原稿とりまとめ：沖本 レイアウト：月成)